

放射線科部（放射線診療科、放射線技術科）

診 療

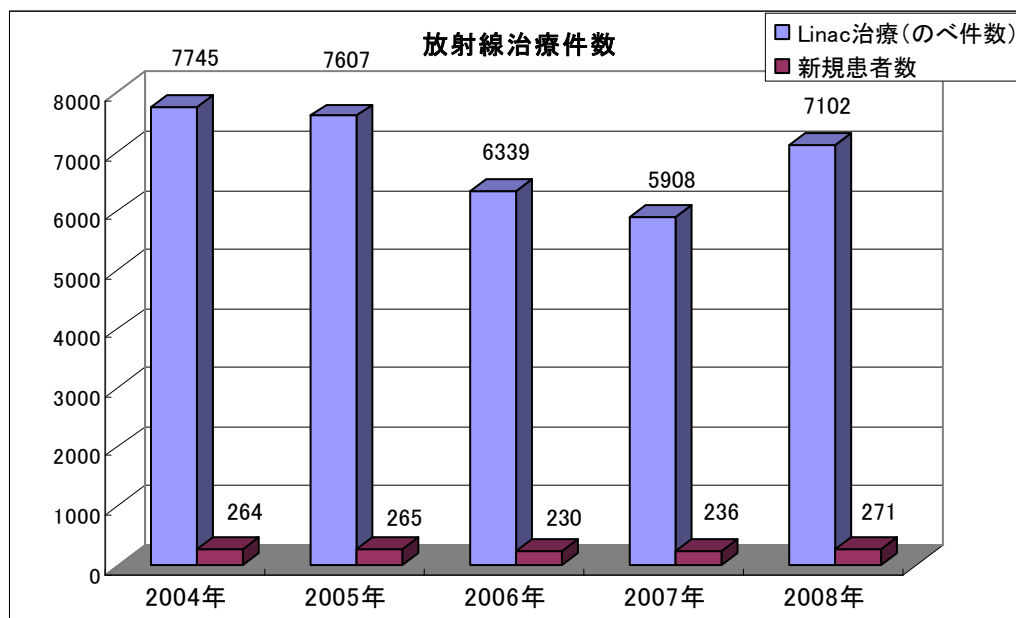
昨年放射線科部の診療状況は、診断部門では一般単純撮影件数、骨軟部関係はやや減少したが、乳房撮影は引き続き増加傾向であった。来院患者の疾患構造の変化を反映していると思われる。CT実人数はこの3年はほぼ横ばいであるが、1件当たりの撮影シリーズ数は造影の多時相撮影化などで、実質的な検査量は増大し、読影はthin sliceを含めたモニタによるページング診断を基本としている。造影剤をさらに増やして、検査待ち期間の短縮にも努力している。緊急検査数も変わらずに10件ほどあり随時対応している。MRIは増加し、RI、USは減少傾向であった。USは腹部が主体となっているが、頸部の生検依頼も継続的にある。血管造影は昨年も肝癌を中心とした治療が同等にあり、この数年来の傾向は変化していない。消化管検査は、上部消化管造影はやや減少傾向、大腸検査は数年で変わらない状況であった。非血管IVRとしては、この3年は100件程度の生検を行っている。

治療部門では、機器更新時を除いて、この数年は、安定して300件弱の新規患者様を治療しており、放射線治療の重要性は変わらない。対象疾患は脳腫瘍、喉頭癌などの頭頸部腫瘍、乳癌、肺癌、食道癌、大腸癌、前立腺癌、子宮癌、骨軟部腫瘍、白血病、皮膚癌など、従来同様悪性腫瘍全域にわたっているが、昨年も乳癌、肺癌、食道癌、大腸癌、前立腺癌が多い傾向は変わらなかった。患者は近隣の岡崎市民病院からの紹介がおよそ40%程度を占めており、根治的治療と対症的治療が同程度の割合である。

抱 負

今年は透視装置、USが更新される予定で、フルオーダーリングシステムも導入され、患者情報共有の利便性がさらに高ま

ると考えられる。オーダーリングシステムと画像保存閲覧システム（PACS）との連携も念頭においており、また、最近是他院からの紹介患者様が持参するCDなどのDICOMデータも積極的にサーバに取り込み、患者様の過去検査歴として、診療現場各所から見られるようにしており、将来にわたる有機的な診療資源の活用を志向している。本来は患者IDとして、医療機関毎でなく、統一されたものが利用されるべきであるが、今後の全国的なコンセンサスを得て実施される施策を待たなければならない。ネットワークの整理、PACSの速度の向上と安全性、電子カルテ移行期としての準備を念頭においてシステム化に取り組んでいる。医療環境は引き続き厳しいと予想されるが、進化および複雑化する検査内容の習得、指導教育にも力点を置いて、がんセンターとして地域がん診療の拠点を担う体制を堅持、発展させていく責務を果たしたいと願っている。



2006年11月から2007年3月まで更新工事のため治療休止

